さんはバイク便業務の後、流関連の仕事に従事していたが、その中で辛い交通事故を経験したという。

当時20代だった片桐さんは、勤務の帰り、バイクに乗っていた。交差点で急な左折をしてきた乗用車にバイクごとはねられ、全身打撲と骨折、全治1年半の大怪我をしたという。現在後遺症は残るものの、幸い日常生活には支障がないという。身をもって交通事故を経験した片桐さんは、「事故のニュースを見るたびに自分は絶対に起こさないと心に誓っている」とし、「痛みを知っているからこそ、他人には絶対に経験してほしくない」と語気を強める。

片桐さんは同社に入社後、大型免許と玉掛けの免許を取得。現在、大型トラックで鋼材を運搬している。片桐さんは同社の仕事について、「鋼材の仕事は危険が付きまとう」としながらも、「専門の仕事はプロの仕事という意識でやっているので誇りもある」と語る。

将来について、「トレーラにも挑戦していきたい」と話す片桐さん。「引き続き油断慢心せず、安全第一で仕事に臨みたい」と笑顔で語った。

（越後桃子）

職業柄、不規則な間かけて改善に向け指導していく。

同専務もこの特定保険診断を通じて減

前向きに取り組めているのだという。

高橋専務は、「健康に関してはこれま

するアナウンスを徹底していくとしている。

（越後桃子）

各港の特色踏まえ施策

関東地整 森橋港湾空港部長就任会見

【関東】関東地方整備局は4月28日、森橋真港湾空港部長の就任会見を開催した。同部長は「社会資本の整備を、国民や利用者の理解をいただきながら着実に進めていく」と抱負を述べた。

防災への取り組みについては、首都直下地震が想定される中、物流を含めた首都機能を維持していくために各主体がどう動かなければならないか情報を共有する必要があるという認識を示した。

また、施設整備については「一足飛びにはできない。しっかり計画を作って、それに基づいて着実に進めていくしかない」と指摘。ハード面とソフト面の双方から一つ一つ計画を進めていく必要があるとした。

カーボンニュートラルに関する取り組みが横浜港や川崎港において活発化していることについて、水素やアンモニアの輸入拠点となるだけではなく、工業港としての歴史からCO2排出への問題意識があったからこそ迅速に対応することができたのではないかと指摘。「先行事例として他の港でも活用できれば」と述べた。

森橋港湾空港部長

一方、工業地帯がない港もあり、港ごとの特色を考慮し、施策を進めていく必要があるとした。

新・港湾情報システム「CONPAS（コンパス）」については、「港ごとにニーズや課題は違ってくる」と指摘。

横展開を進めていく上では、試行期間を設け、各港やターミナルごとに課題解決に必要な機能を精査することが重要であるという考えを示した。

（田川侑史）

眠気を注意喚起

清水運輸

ブログトップ画面

対処法をブログで紹介

【埼玉】清水運輸（清水英次社長、志木市）は4月27日、自社ブログを発行し、夏場に向けた冷凍・冷蔵のPRと入間および富士見倉庫の空き状況を報告した。

また、季節の変わり目は眠気を誘いやすいことから、「眠気を誘いやすいタイミング」を標記し注意を促し、眠気を感じた時の対処法等を紹介し、安全運転を呼び掛けている。

同ブログは清水運輸グループのホームページから閲覧可能。

（小澤　裕）

運輸と倉庫 連携深め成長へ

玉家運輸倉庫とワン・ツー・ストック 経営計画発表会

【神奈川】玉家運輸倉庫（児玉聖司社長、横浜市）並びにワン・ツー・ストック（同）は2日、経営計画発表会を開催した。玉家運輸倉庫は53期、ワン・ツー・ストックは36期を迎えた。

昨年度は、グループ全体として、前年比10%アップの売り上げを達成した。事業別では、倉庫部門は両社ともに在庫数量が増加。運輸部門はこれまでで最高の配達個数を達成。昨年同期比で1%の成長となり、「業績にも現れている」と述べた。

経営計画を発表する児玉社長

同社では毎年、長期事業構想書を作成。今後5年間を見据え、事業、利益、要員、施設など各分野における具体的な目標数値を設定している。

事業計画の面では、運送業だけではなく、倉庫など物流全体を委託したいという顧客ニーズから、運輸事業と倉庫事業の連携を深め物流パッケージとして提供していくPL事業を推進し成長につなげていくとした。

事業計画を進めるにあたり、3点の本方針を策定。「従業員重視」で社内コミュニケーションの充実を図るとともに、健全経営を推進する。「お客様本位」については、顧客にあせて仕事のやり方を変えていくこと。③「独自能視」については、経営計画書を共通の道しるべとし、PDCLAサイクルを回して向上をはかっていく。

同社が根幹にある環境整備に